

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

no
6

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

チュウホクドットコム

中北の地域社会 (COM munity)の心の交流 (COM munication)をめざします

平成29年度 第3回 峡中地区・峡北地区 合同地域教育推進連絡協議会

1月30日(火)、峡中・峡北地区地域教育推進連絡協議会が北巨摩合同庁舎で開催されました。今年度の事業報告、来年度の事業計画について協議をしたあと、研修会として、韮崎市青少年育成プラザ「Miacis(ミアキス)」について、運営にあたっているNPO法人から講演をいただきました。

乳幼児や小学生に対する支援施設はいろいろありますが、中学生、高校生のための支援施設というのは県内ではほとんどありません。そんな中、韮崎市は、中高生の自主的な活動をサポートし、将来、地域の発展に寄与する人材育成をめざす施設として「ミアキス(Miacis)」を設置しました。平成28年10月にオープンして以来、様々な団体や機関からの視察も相次いでいるそうです。この施設のねらいや活動の現状などについて、事務局長、施設長のお二人からお話いただいた概要をお伝えします。

「中高生に大人を。大人に中高生を。」

青少年育成プラザ「ミアキス」 事務局長 松本恵子氏 施設長 西田遙氏

【ミアキス(Miacis)の誕生】

韮崎市では、平成27年に市民と市役所職員が一緒に地域のことを考えていく「まち・ひと・しごと地方創生審議会」が発足した。その中で、子供たちの教育についてもっと地域でやれることがあるのではないか、また、成長に応じた切れ目のない支援をしていきたいという委員からの意見と、若者の人口流出を抑えたいという市側の思いが合致して『韮崎愛育成come back支援プロジェクト』がスタートした。このプロジェクトを実行するために設立されたのが「ミアキス」である。「ミアキス」は、中高生が放課後に地域と交流する拠点であり、地域のことを知り、地域の大人と出会い、交流することで、将来への展望を持てるようになることを目指しているが、長期的には、中高生が「ミアキス」での体験によって「韮崎愛」が育ち、将来韮崎に帰ってきて(come backして)、次世代の中高生を支援すること、また、このような取り組みを発信することによって、韮崎に魅力を感じて住みたいという人が増えていくことを目標としている。

【ミアキスという名称】

ミアキスとは、猫と犬の祖先とされている動物の名前である。同じ環境下にいながらも、樹上から降りて犬へ進化したものもあれば、樹上に残り猫へと進化を遂げたものもいた。中高生も、ミアキスのように環境や選択次第で何者にも進化し得る可能性を秘めた存在である。この拠点で活動することによって、多くの選択肢を持ち、未来を切り拓く力をつけて欲しいという願いをこめた。

【ミアキスの活動(コンセプト)】

「ミアキス」は、中高生による中高生のためのパブリックスペースである。中高生が自らパブリックスペースを運営することで、実社会により主体的に参画できると考える。公共とは？地域とは？自分とは？といったことに関して様々な経験や学びを通して考えて行動していく中で、未来を自分たちで作っていけるようにしたい。施設を作るにあたっては、趣旨に賛同した高校生たちが意見を寄せ、若者にとって魅力ある環境づくりを心がけた。同世代の間や



松本 事務局長

少し年上の先輩や大人が集い、交流することで、自然に人を知り、まちを知り、仕事や社会を知ることができる場所となるよう心がけている。様々な仕事や価値観、知識や情報に触れ、行動し、考え、議論し、その中で自分の選択肢を



西田 施設長

を拡げていくことができる場所、家庭でも学校でもない第三の居場所を目指した。中高生は、そこで、やってみたいことを企画し、体験することで、中高生から大人へ、地域へというベクトルが生まれてくると考えている。あくまで主体は中高生であって、大人の考えや、わかっていることの押しつけはしない。答えのないことに挑戦していく。

【主な活動の内容】

中高生の要望や、地域や商工会などからの提案をもとに、様々な人と連携してイベントを企画している。

- ・市の広報紙に「ミアキスマイル」という欄を設けてもらい、中学生の編集者が毎月取材をして記事を掲載。
- ・山梨大学医学部生による講演「どうしたら頭が良くなるか」。
- ・留学中の大学生や海外生活の経験者を呼んで、海外生活に関する話を聞く。

- ・キャンパスウィーク:話を聞きたい大学・学部のアンケートをとり、上位のところの学生に来てもらってリアルな大学生事情を聞く1週間。
- ・ラジオ番組の制作:社会に向けて前向きな発信をしたいという不登校経験者の思いを実現。現在、ローカルFM局に交渉し、月1回45分の枠をもらってやっている。
- ・料理のイベント。
- ・ニコリを会場とした夏祭り。
- ・地域の昔話(韮崎市円野町に伝わる「つぶら姫」)を大きな紙芝居にして上演。
- ・韮崎駅の地下道の清掃。
- ・普段発表する機会のないマイナーな踊りやダンスをやっている子たちを集めての文化祭(発表会)。
- ・コーヒープロジェクト:コーヒーが好きで将来店をやりたいと考えている子が、今のうちから実際にやってみようというイベント。
- ・市会議員との交流イベント:「最強の町をつくろう」。
- ・卓球のラケット作りワークショップ:自分たちでラケットを作り卓球をする。(ミアキスには卓球台がある)
- ・森の中でたき火をしながら、「豊かさとは何か」などの哲学的なことを語り合う。
- ・ボードゲーム「キャッシュフロー」:経営者に教えてもらいながら「キャッシュフロー」とは何かを学ぶ。

研修会の後半は、参加者に「豊かな教育」をテーマに、各自の考えをグループで発表し合うワークショップが行われました。子どもを育むために大事な教育を考える機会になりました。そして、講師の「様々な立場の考えは共感できるものであり、それぞれの考え(意見)を今後のミアキスの活動に生かしたい」というまとめにより、研修会を終了しました。



○アンケートから

<参加者の評価> (回答者63名)

・良かった 53名(84.1%) ・普通 9名(14.3%) ・良くなかった 1名(1.6%)

<感想>(一部)

- ・家庭と学校と地域をつなげる活動を立ち上げたミアキスのことを知り、子供たちを支える支援団体に応援したくなりました。子供たちが、より人との関わりを広げ、視野を広め、考え方を深めていくことが大切だと思います。多くの人に支えられ、自信を持って生きて欲しいと願っています。。
- ・中高生が、社会と繋がる、発信するアイデアいっぱい紹介していただきました。子供たちがアイデアを出し、それが実現したとき、友達の表情が生き生きしているのを感じました。企画し、準備し、運営していく中で、仲間同士が繋がり、大人と子供が繋がり、子供が社会と繋がっていくということがよくわかりました。
- ・今の社会の現状を憂いている人が多い中で、講演にあった活動は、まさしくだれもが望んでいる素晴らしい実践ではないかと感動しました。子供(人)は、人と人との関わりの中でこそ、真に人間性豊かに成長していくのだと、中高生の活動の姿や、その笑顔を見てしみじみ思った。

小中連携あいさつ運動 櫛形中学校

今年度、櫛形中学校では、生徒による「小中連携あいさつ運動」を実施しています。この運動は、櫛中生が朝の登校時に出身小学校に行き小学生に元気なあいさつ運動をすることで、地域や小学校に感謝の気持ちを表すとともに、小学生の見本となるよう日常生活を見直す機会とするために始めました。今年度は、3年が7月、2年が12月、1年が3月に実施します。

12月20、21日の2日間、櫛形中学校の先輩が豊小学校に来て、あいさつ運動を実施しました。豊小学校を卒業した2年生の学年生徒会が中心に参加しました。先輩の大きな「おはようございます」の声に、小学生も負けじと「おはようございます」と返します。21日の朝は-5℃で



ましたが、朝から爽やかであたたかな雰囲気、豊小学校に流れていました。櫛形中学校は、「あいさつ運動」から生徒同士のあいさつも増え、お互いに気持ちを伝えやすい雰囲気が生まれてきているようです。また、地域からも、櫛中生はあいさつをよくするとされるようになりました。今後も「あいさつ運動」を継続しながら、いろいろな場面での小中連携に取り組んでいくそうです。



親子で楽しむちっちゃい音楽会 常永小学校

常永小では、平成27年度に「コミュニティ・スクール」に指定され、地域と共にある学校を推進し、学校と保護者、地域の連携を深めてきました。

1月6日(土)は、「親子で楽しむちっちゃい音楽会」と題し、常永小のランチルーム(多目的ホール)を会場に、児童や保護者、地域の方に、オーケストラの生演奏会を企画しました。今回演奏していただいたのは、保護者も参加している弦楽合奏団の市民オーケストラ「たま弦」です。山梨大学医学部のOBで結成さ



れていて、病院のロビーやコンサートホー



ルで手作りの音楽会を定期的開催しているそうです。音楽が好きな人やクラシック音楽が初めての人、大人も子どもも楽しめる音楽会でした。途中、4人のかわいいソリスト(児童)による演奏もあり、大きな拍手に包まれていました。

常永小では、1年間を通じコミュニティ・スクールとしての活動を行っています。2月には、「常永地区みんなの作品展(コミュニティ・ギャラリー)」を開催し、児童や保護者、地域の方、先生の趣味の(芸術)作品を展示し、学校と保護者、地域の方々との交流を図りました。地域と共にある学校として、今後の継続した取り組みが楽しみです。

各教室の活動を発表 山梨ことぶき勸学院 活動全体発表会

1月26日(金)、山梨ことぶき勸学院活動全体発表会が、県立文学館講堂で行われました。これは、県下6つある各教室の2年生代表が、勸学院生全体に活動内容を発表するものです。各教室が自主的、自発的に取り組んでいることを発表するもので、中北管内の甲府教室は「学びを深める 絆を深める」、中北教室は「山梨の神楽」というテーマで行いました。甲府教室は、日ごろの活動の紹介として、クラブ活動(郷土史、朗読、パソコン、歌声サークル)、かえで支援学校付近の清掃活動や正月飾り作りなどの体験活動などを紹介しました。また、中北教室はグループ研究



で取り組んだことの発表でした。峡北地域に残っている神楽について、実際にいくつもの神社に足を運んで取材した労作で、内容のレベルが高いだけでなく、写真や動画を用いたわかりやすい紹介でした。過疎化や高齢化で、神楽の継承は難しくなっているところが多いようです。舞い方やお囃子などは、文字としての記録がほとんど無く、見たり聞いたりしながら実際に演じることで受け継がれてきました。貴重な地域の文化遺産なので、ぜひ今後も存続して欲しいと思います。

「ヘレン・ケラー」と言えば、視覚聴覚の障害を乗り越え、障害者福祉に力を尽くした人として小学生でも知っている有名な人です。しかし、彼女に仕上げや文字、言葉を教え、人生に光明をもたらしたサリバン先生がいなければ、今日私たちが知っている「ヘレン・ケラー」はいないでしょう。ところで、日本の盲ろう教育は、いつどこで始まったか御存じでしょうか。実は、山梨で行われていました。サリバン先生に劣らない情熱をもって取り組んだ人々のことは、残念ながらあまり知られていません。ぜひ、このことを知っていただきたく、ここに紹介いたします。

戦後間もない昭和23年、山梨県立盲啞学校（現在の盲学校）の堀江貞尚校長は、県内の盲児、ろう児の実態調査を行った。調査は、県下すべての小学校教員および児童の協力を仰いだ。教員が児童に「みなさんの家族や近所に、目が見えない人や耳が聞こえずしゃべれない人はいませんか。もし、いたら赤ちゃんから年寄りまで一



堀江貞尚 校長

人残らず知らせてください。」と呼びかけ、校長から教育長経由で堀江校長に情報が届くようにした。そして集まった情報をもとに堀江校長以下盲啞学校の職員が休日を利用して該当の家を一軒一軒訪ね、専門の見地から実態調査を行った。その結果盲児40名、ろう児190名が確認され、その中に盲ろうの重複障害児が5名いることがわかった。うち4名は重度の精神障害や発育不全があって指導の対象とするには無理があるものの、2歳の時に病気で失明失聴した4歳の男児Aは教育の効果が期待できると判断された。そこで、堀江校長はこの男児の教育を決意し、昭和24年、入学準備が2人の担当教諭によって始められた。A君は生活訓練や歩行が十分ではなかったため最初は寄宿舎に入れず、2人の担当教諭が自宅に引き取って面倒を見、学校にはおぶっていった。一方、この年に盲啞学校は盲学校とろう学校に分かれ、堀江校長はろう学校へ移り、盲学校には三上鷹麿校長が就任した。三上校長も盲ろう教育に理解を持っており、堀江校長の考えを受け継いだ。

昭和25年、A君は正式に入学、寄宿舎に入っている学校教育が始まった。そして翌年、横浜から児童相談所を通して7歳の女児Bの入学が依頼される。Bさんは、3歳の時に高熱のため失明失聴していた。A君の指導だけでも大変な状況ではあったが、三上校長はここで拒否すればBさんは救われないと考えて受け入れを決めた。

2人とも基本的な生活行動（食事、洗面、排泄、歩行等）

が身につけていなかったため、指導はここから始まった。光も音もない世界に身を置いている2人に対して、気の遠くなるような回数 of 働きかけが繰り返された。初期から関わっていた担任寮母は「若さと体力と情熱、そして何よりも好奇心がなくてはできない仕事でした。」と述べている。最初の夏休み、担任寮母はBを連れて自分の実家で過ごした。このとき近所の人たちに「Bちゃんはみんなで見てあげるから、休みなさい。」と言われ、床に就いた彼女は2日間眠り通したという。山梨盲学校の取り組みが成果を挙げられたのは、教諭たちだけでなく、寮母たちの昼夜を分かたぬ献身的な指導があったからである。



三上鷹麿 校長

基本的な生活行動の指導の次の段階は、言語の習得である。点字と物の結びつけ訓練が繰り返された。また、のどや唇を触らせて言葉を読み取らせる「触話法」も始められた。しかし、両方とも思うような進歩が見られない。そのころ三上校長の旧知の梅津八三教授（東大心理学）が盲学校を訪れ、偶然、盲ろう児に出会い、教諭たちが試行錯誤している様子を見た。これがきっかけとなり、東大や東京教育大などの心理学の専門家など6名からなる盲聾教育研究会が昭和27年に発足、メンバーは頻りに山梨盲学校を訪れて盲ろう児と接し、科学的な理論や最新の学術研究をもとに教育方法が模索された。また、昭和30年から昭和45年までの9年間、文部省の実験校に指定され、実践が積み重ねられた。その結果、点字の受発信ができるようになった。昭和30年にヘレン・ケラーが来日した際、2人は日比谷公会堂で面会し、Bさんは点字の手紙を渡している。その後も指導は続き、音声による発信、指文字による受発信なども訓練され、さらに算数や社会の教科学習も行われた。

山梨県立盲学校の盲ろう教育の特徴は、教諭、寮母、研究者が情熱を持ち、科学的、系統的な実践を積み重ねた点にあります。また、指導記録や教材教具、映像や写真など、膨大な資料が残っていることも注目されています。これらは、後生に残すべき貴重な遺産と言えるでしょう。

なお、Aさん、Bさんは、現在も点字や指文字を使いながら元気に暮らしていらっしゃいます。